

# 青年海外協力隊・帰国理数科教員の知見を活用した理数科教育等の充実を図るための研究

宮古 昌

北海道には青年海外協力隊・帰国教員が比較的多く、今春以降十数名単位で「現職教員特別参加制度」で派遣された教員が帰国してくる（以下、この制度で派遣された教員も含めて帰国教員）。帰国後は教育現場に戻ることから、教育現場における協力隊経験の還元が期待されている。そこで、交流イベント「理数科教育について考えよう！！with JICA研修員・青年海外協力隊帰国教員」を実施し、理数科を中心とする帰国教員のネットワークを強化し、組織的に協力隊経験を教育現場に還元する国際教育協力モデルを研究した。

【キーワード】 青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」 国際教育協力 理数科教育

はじめに

文部科学省は、平成13年度から現職教員特別参加制度を創設し、5年間で353名の教員が派遣された。帰国後は国際理解教育・各教科教育における指導力の向上などが期待できることから、この制度に積極的に取り組む教育委員会も増えている。しかしながら、これまでの帰国後の還元活動は、個人の努力に負うところが大きく、体験談の報告などにとどまり、経験を生かす場があまりないこともあり、経験が十分に活用されない場合が多い。そこで、文部科学省は、本年度から「国際協力イニシアティブ」事業により帰国教員の活動に関する支援も行っている。

教育界におけるグローバル化というタイミングを活かし、国際教育協力の重要性を認識してほしいという願いを込めて、上記の交流イベントを実施し、理数科を中心とする帰国教員のネットワークを強化し、組織的に協力隊経験を教育現場に還元する国際教育協力モデルを研究した。

## 1 交流イベント当日

当日は、道内の小・中・高等学校の帰国教員の運営により、道内の小・中・高等学校の主に国際理解教育を实践されている教員44名と一般

市民9名の参加により、アフリカからの理数科教員と共に交流が行われた。午前中は任国の教育事情の紹介を、午後は帰国教員が任国で開発した教材や当センターが開発した教材等を通して教え方について議論、最後は、帰国教員がファシリテーターとなり、自らの経験を交えて、アフリカと日本の教え方の違いなどを切り口に、教育の在り方について話し合った。以下は、交流イベントのプログラムである。

### 【アクティビティ1】 観察・実験サイエンスショー

「石って面白い?! ~科学を伝える方法~」  
サイエンスショーを通して、科学を伝える方法について考えてみます。

### 【問題提起1】

「マラウイ・ウガンダで取り組んだこと」  
教育協力は特に今後、主導的役割があるといわれています。ここでは「マラウイとウガンダ」における理数科教育の現状と青年海外協力隊による教育協力のあり方について、教材体験を交えながら考えます。

### 【問題提起2】

「タンザニアの教育事情についてみんなで考えてみよう」  
アフリカにおける理数科教育の問題点は様々ありますが、根底には日本と同様の問題も存在します。タンザニアの理数科教育の現状を日本と比較することで、日本の教育を見つめるきっかけとします。

### 【アクティビティ2】 ホスターセッション

「途上国で実験実習指導は有効だろうか？」  
1. 10テーマの帰国教員が開発したローコスト教材・実験等の紹介と活用についての話し合い  
2. 数学教材の紹介と活用についての話し合い  
途上国における実験実習をアフリカからの教員と一緒に体験していただき、その有効性を途上国の視点から考えていただきます。

### 【問題提起3】

「学びについて語ろう！～途上国と日本の教育事情から～」  
 1. 途上国における理科教育問題の視点からの気づき  
 2. 途上国における数学教育問題の視点からの気づき  
 開発途上国の問題や現状について理数科教育の視点から見つけ、アフリカからの教員や青年海外協力隊OBとともに知見を深めることによって、広く「学び」の意義や可能性を語り合います。



図1 アクティティ2（左）と問題提起3（右）

## 2 成果と課題

この交流イベントを通じて小・中・高等学校の帰国教員とのネットワークがさらに強まったことは大きな成果である。

また、表は、各プログラムに関し「当初の研修参加の目的を達成するための参考となりましたか」に対するアンケート調査の結果である。

プログラム	参考になった	少し参考になった	あまりならなかった	ならなかった
アクティティ1	71%	26%	3%	-
問題提起1	71%	29%	-	-
問題提起2	59%	41%	-	-
アクティティ2	61%	36%	3%	-
問題提起3	66%	24%	10%	-

今回の参加者の多くが理数科の教員ではなく、国際理解教育を実践されている教員が多かったことから、当初、満足のいく内容となるのか心配したところもあったが、アンケート結果からは、参加者の多くが各自の研修参加目的を達成できたと考える。また、参加者のコメントからは、「生の声が聞けて良かった。」「アフリカの教育者の方と直接議論できて刺激となった。」「国際協力と言われただけでは伝わらない実情や細かい点を知ることができた。」「海外でも指導内容や指導方法で困るポイントは同じなんだという印象を受けた。」「学校へ戻って生徒に伝えることが多くあります。」「途上国の状況を学ぶことによって、日本の教育状況の見直しができた。これを日本の教育に反映できる場はあるのでしょうか。」「国際交流だけでなく教育の大切さを改めて感じる一日であっ

青年海外協力隊・帰国理数科教員の知見を活用した理数科教育等の充実を図るための研究

た。」「ポスターセッションは色々と沢山みることができて良かった。授業で活用させていただきませう。」など好意的な感想が多く寄せられ、参加者に、理数科教育の具体的な指導法はもとより、様々な視点から理数科教育あるいは教育そのものの在り方を考える機会を与えることができたと考える。また、JICA研修員全員からも、この交流イベントは彼らの研修にも大いに役立ったという回答を得ている。しかし、双方から「もっと内容について話せる時間があれば良かった。」「ちょっと慌ただしかった。」など、プログラムの内容が盛りだくさんだったことによる運営上の課題や参加対象者の設定に関する課題などが残された。また、運営者からは、自分の勤務している学校で研修員を受け入れ、一定期間、研修員と共に授業、教材開発などができると、生徒を巻き込んだ還元活動ができるのではという大きな課題もいただいた。

おわりに

教育全般を通じた国際化・グローバル化への対応が求められている現在、英語教育のみならず、海外からの教育関係者とともに教育について議論を交わし、お互いに学び合うことはとても有意義なことである。ここで示した交流モデルはグローバルな教育を支援する方法の一例である。予算付けを含め、研修員を受け入れる機会がなければ、継続した帰国教員のこのような活動は困難である。このような活動の積み重ねが国際的な素養を育て、今後の我々人類がともによりよく生きる知恵につながるものと考え、NGO等の援助関係者と連携した、帰国教員の海外での教育経験が教育現場に還元される有効な活動方法を今後さらに検討して行きたい。

なお、本研究は文部科学省の平成19年度「国際協力イニシアティブ」事業として、青年海外協力隊北海道OB会が委託した帰国教員の活動を支援する交流イベントを活用させていただき行ったものである。

(みやこ まさし 地学研究室研究員)

宮古 島